



菅平生き物通信

ホームページ <http://www.sugadaira.tsukuba.ac.jp> 電子メール ikimono@sugadaira.tsukuba.ac.jp 電話 0268-74-2002 Fax 0268-74-2016

シミ（人とともに生きてきた昆虫）

「生き物通信49号」で紹介した「イシノミ類」と同様に、「あまりにも原始的で、まだ翅を獲得していない昆虫である」無翅昆虫類には、他に、カマアシムシ類、トビムシ類、コムシ類、そして「シミ類」がいます。このシミ類は、ほとんどの昆虫類が含まれる、翅をもつ「有翅昆虫類」の直接の祖先といわれ、昆虫の進化においてたいへん重要なグループであると同時に、私たちには馴染み深い昆虫です。

シミ類にはアリやシロアリの巣、海岸の砂、林の落葉の間など、野外に住むものもいますが、屋内棲や人の生活圏によく現われる種類も多く、乾物や紙・布などの繊維質を食べる家屋害虫として認識されています。しかし、原始的な昆虫のシミ類は顎が弱く、書籍に何頁にもわたって貫通するような食害をした

り、衣服を台無しにするような悪行ははたらきません。これらは濡れ衣で、前者はたいてい「フルホンシバンムシ」という小さな甲虫、後者は「イガ(衣蛾)の幼虫(イモムシ)」のしわざです。3本ある尾を含める体長は1cm前後、銀色



ヤマトシミ *Ctenolepisma villosa* (Fabricius)



セイヨウシミ *Lepisma saccharina* Linnaeus

の鱗粉で体が被われ、シミが素早く走っている様は、まるで「銀鱗を輝かせて泳ぐ魚のよう」。そこで、漢字では「紙魚」、「衣魚」と書き、英語でも silverfish (シルバーフィッシュ) と呼ばれます。長野県で普通にみられる種類は「ヤマトシミ」と「セイヨウシミ」です。ヤマトシミは体が白銀色の鱗粉で被われ、毛が多く、腹端の背板が丈の低い台形。一方、セイヨウシミの体はやや暗い銀色、毛が少なく、腹端の背板は長い台形であることで区別できます。古来から日本に生息するのはヤマトシミで、セイヨウシミに関しては、1943年に奈良の春日大社の森のカシの樹皮下から採集されたのが最初の正式記録

です。そのセイヨウシミは現在日本全国から知られていますから、生活の欧米化に歩調を合わせるように、セイヨウシミがヤマトシミを駆逐しつつ分布を拡げている、そのような図式で捉えられてきました。

しかし最近、「古文書昆虫学」を提唱している深川博美さんが、たいへん興味深い研究をされました。「古文書昆虫学」とは、古文書の頁に挟まれてしまった、あるいは古文書の和紙に漉き込まれた蟲(昆虫、それ以外のクモや多足類等も含めた節足動物全般)を丹念に調べることで、昔の人々の生活、物流、昆虫相、環境などを総合的に理解しようという、新しい研究分野です。驚くことに、深川さんによると、少なくとも江戸時代において、場合によっては、ヤマトシミよりセイヨウシミのほうが多かった可能性があるというのです。今までの認識をどのように考えるべきか難しいのですが、「シミ」という小さな「害虫」を種で区別していなかったのかもしれない。さらにいえば、人の環境に生息してきたシミたち、彼らの分布は、人々の物流で広げられたと考えられます。例えば、書籍に産下された卵が書籍と一緒に他の地域に運ばれることが普通におこるでしょう。ヤマトシミは極東に広く

催し物案内 1

「まちなか自然講座」昆虫・植物・菌類

5月15日より毎週月曜日 18時半～20時 全9回

山岳科学センター菅平高原実験所の教員3名が、一般向けに講義をおこないます。講義内容は、大学生向けに行なっているものと同じレベルです。「影の働きものキノコ・カビ・コウボ」菌類系統分類学、「出川洋介、「草木たちの命のリレー」植物保全生態学」田中健太、「昆虫たちのサクセスストーリー」昆虫系統分類学」町田龍一郎。自然や生物についてもっと知識を深めたい、筑波大学の授業を体験してみたい、といった方におススメです。全講座の7割以上に出席された方には、修了証が授与されます。

会場：まちなかキャンパスうえだ

(上田市中央2-5-10 丸陽ビル1階)

アクセス：上田駅お城口から徒歩約10分。お車でお越しの方は、周辺の有料駐車場をご利用ください。

受講料：無料

対象：一般(定員20名)

申込期間：4月24日(月)～28日(金)

お名前・ご住所・電話番号・メールアドレス・この講座を何で知ったのか・申込の動機を明記の上、電子メールにてお申込ください。応募多数の場合、先着とさせていただきます。

申込・問合せ：筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所

(上田市菅平高原1-278-294) 担当：佐藤

電子メール：ikimono@sugadairatsukuba.ac.jp

電話：0268-74-2002(平日9～17時)

「山岳科学センター」誕生!

平成29年4月1日、「筑波大学山岳科学センター」が誕生しました!

筑波大学の4つの特色ある山岳・森林フィールド(菅平高原実験所、八ヶ岳・川上演習林、井川演習林、筑波実験林)と山岳科学を広くカバーする豊富な人材を活用し、山岳・山間地域に関わる先進的な研究を推進します。(筑波大学WEBより抜粋)

名称は変わりますが、菅平高原実験所では今まで同様に一般向けの自然観察会の開催や、樹木園の公開(平日9時～17時)、菅平生き物通信の発行などを行なってまいります。また、八ヶ岳・川上演習林では「恵みの森」、筑波実験林では「筑波植物見本園」が一般公開されています。ぜひ足をお運びください。



季節の便り



この通信が皆様のお手元に届くころには、上田城の桜が見頃を迎えているでしょうか。菅平高原実験所の桜は、まだ冬芽を閉じて春を待っています。(3月17日)

書籍紹介 『ざざ虫く伊那谷の虫を食べる文化』

菅平で雪の上を歩くカワゲラを観察した後(菅平生き物通信43・45号参照)、私は伊那の天竜川に向かいました。ここでは日本、いや世界で唯一、食べるために川虫(カワゲラ・トビケラなど、川の水中で生活する昆虫)を採集する「ざざ虫漁」が行われています。私は、長野の川虫を研究している者として、かねてからざざ虫漁を見たいと思っていました。

現地に着いた私は、興奮のあまり車のライトを消し忘れ、バッテリーを上げてしまいました。途方に暮れる私に救いの手を差し伸べてくれたのが、ざざ虫漁の第一人者で、本書にも登場される、中村さんでした。

表紙に載っている両手いっぱいイモムシっぽい虫たち。この虫たちがうごめいている姿を想像すると、大いに圧倒されます(人によってはグロテスクに感じるかも...)が、これが本書の主演、ざざ虫です。本書では、ざざ虫とはどのような意味なのかというところから出発して、実際の漁の様子や、ざざ虫を効率よく捕まえるための工夫、なぜ寒い冬に漁を行うのか、といっ



天竜川でのざざ虫漁。虫踏漁業の許可が必要です。

たことが、豊富な写真と分かりやすい文章で紹介されています。続いて、私たちの最も気になるところである、ざざ虫はどんな味なのか、どうやって調理して食べるのかといった、郷土料理としてのざざ虫の姿をうかがい知ることになります。最後には、ざざ虫漁という、伊那の誇る文化を未来へつなげていくための取り組みが紹介され、本書は締めくくられます。

本書は学術専門書ではなく、小学校低学年から楽しめる絵本(写真えほん)です。とはいえ、現時点では、ざざ虫漁についてこの書籍以上に写真が充実しているものはありません。また、本書ではざざ虫漁を例にして、地域特有の文化を守っていくことの大切さを訴えています。そういう意味で、この書籍の内容は大人も子どもも一緒に楽しめて、一緒に考えさせられるものです。

ちなみに、ざざ虫は県内のスーパーや土産物屋で購入できるほか、千曲川でも調達可能です。本書を参考に、ざざ虫漁にチャレンジするのもありかもしれません！ (武藤将道)



『ざざ虫』

『伊那谷の虫を食べる文化』

松沢陽士／写真・文

フレールベル館

催し物案内 2

「高原の植物観察く植物と人や自然の関わりを知ろう」国際植物の日提携イベントとして、菅平高原実験所教員による講演と野外観察を行います。

講演内容：植物の多様性が人や国の命運を握ってきた(田中健太)／海流によって移動する植物たち・気候変動を考慮したマングローブの保全遺伝学的研究(津田吉晃)

日時：平成29年5月21日(日)

受付開始10時 講演開始10時半 終了15時

会場：筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所

(長野県上田市菅平高原1278-294)

定員：30名(先着)

参加費：無料(別途保険代50円)

持ち物等：長袖・長ズボン・歩きなれた靴・防寒着・

雨具・昼食／雨天開催(内容一部変更有)

申込期間：5月8日(月)～12日(金) 9時～17時

申込方法：電子メールまたはFAXにてお申込ください。参加者全員の氏名と住所、代表者の電話番号・

FAX番号・メールアドレスをご記入ください。

申込・問合せ：筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所

電話：0268-74-2002(平日9～17時)

FAX：0268-74-2016

電子メール：kimono@sugadaira.tsukuba.ac.jp

(担当：佐藤)

本通信の印刷・配布は、東郷堂さんに
ご協力いただいています。

次号は6月

発行予定です